

卷 頭 言 —— 最後まで残る仕事 ——

年刊の『木簡研究』も第八号を発行することとなった。しかし創刊以前に三年間、木簡研究集会を開催して『報告要旨』や『記録』を出しているので、実質的には足掛け十二年間、学会活動が続いてきたことになる。此の間、最大の目的である木簡関係の情報蒐集と公開から委員会の運営や大会の準備に至るまで、みな奈良国立文化財研究所の所員の方々のお世話になってきたのであるが、今春には、最初から深く関わってこられた坪井清足所長が退官され、狩野久部長も文化庁に移られた。いままでも委員会メンバーの本務の移動はあり、今春も委員会構成は別に変ったわけではないのだが、やはり時代は着実に変わりつつあるという感慨を拭いえない。

思えば平城宮跡から木簡が出土しはじめて四半世紀が経つ。当初はまだ筆写の時代であり、複写機さえなかった。だから奈文研に行って謄写版刷の木簡釈文を入手しえた先輩がいて、私たちはそれを借りて全文を筆写したし、自分が奈良へ行く機会があればその原稿を携行して、見せて頂いた現物と対校したりした。筆写はコピーと異なって一字一字が頭へ込み込むし、写している間にさまざまな思いつきが湧く。まして現物に逢うと、それが書かれたり捨てられたりした当時にまで空想が拡がる。そのような写本が次第に厚くなってきたころ、平城宮跡からは一時に千数百点も出土したとの知らせがあり、藤原宮跡をはじめ全国各地でも出土したとの情報がある。もう筆写のしようもない。私はいつか諦めて、概報や報告書が出るまでは忘れてしまおうという気にさえなっていた。

坪井さんが東京に來られて、学会をつくる下相談をなさったのは、いつのことであったか。私は勢いこんで一も二もなく賛

成した。ただ学会は本来、国の機関に頼るべきではないと思うけれども、木簡関係情報が最も集まるのは何といっても奈文研なのだから、御迷惑ではあっても当分面倒をみて頂けないものか、などとお願ひした記憶がある。多くの方々も同じ思いだったであろう、まもなく研究集会という形で学会は発足し、やがて『木簡研究』が刊行されるに至った。

『木簡研究』には出土木簡の釈文全部が載っているわけではない。しかし奈文研では、田中琢センター長が『木簡研究』五号に書かれたように、コンピュータには全部入れておられる。昨夏に寄った折り、重々申しわけないとは思いますが、昔から親しい鬼頭清明氏に「贄」という漢字のある木簡全部を検出して頂いた。予想されなくてはなかったものの、点数はやはり少なかった。その字がない限り出てこないのは当然だからである。やはり索引というものは、自分で調べ終ったあと、念のために引くものだという、昔、先生から教わった注意をいまさらのように思いだした。

しかし複写機すら、速いという取得以外に、これは原文そのままだという、筆写には缺けている機能を持つ。ましてや電算機の機能は素晴らしい。従来、学者が学者顔をすることができたのは、博覧強記という言葉もあるように、その頭脳の検出能力によるばあいほとんどであった。ところが今は電算機が、より博くより正確に、その代りを勤めてくれる。結局問題は、人間のまったく勝手な検索要求に対して電算機がどう対応してくれるかであり、そのためのソフトの開発にあるらしい。いやその前に、木簡については、一つ一つの木簡をいかに正確に積読してゆくかという基本的な問題が横たわっている。頭の中ではさまざまな思いつきを浮ばせながら、現に在る事実の前では惜しげもなくその思いつきを捨てて、文献の一字一字を読みとってゆくこと、それだけが学者に最後まで残る仕事かも知れない。

(青木和夫)